

たまシネマ通信

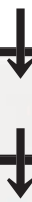
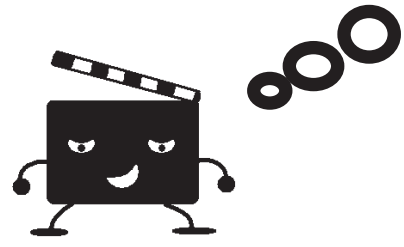


危急存亡の秋

特集

映画zine

はDIYの夢を見るか？



インタビュー

『DVU』
『映画時代』
『Spotted701』
『TRASH-UP!!』



Contents

- ・ 6/13 『1/4の奇跡』 上映会報告!
- ・ 4/18 『大丈夫であるように』 上映会報告!
みなさんのメッセージ「思い事」いよいよ沖縄へ!!
- ・ 実行委員募集!! ・ 映画レビュー「ススメ!映画道」

予想以上につながった「想い事」

『大丈夫であるように—Cocco 終らない旅—』上映と是枝裕和監督ティーチ・イン

—— 山口渉(実行委員)



4月18日(土)に是枝裕和監督を迎えて開催した『大丈夫であるように—Cocco 終らない旅—』上映会は、300名を超えるたくさんの方々にお越しいただき、盛況のうちに幕を閉じることができました。僕にとっては初めての上映会の企画担当でしたが、多摩市周辺に限らず、遠くは四国からの来場者もいらっしゃるなど、TAMAという地域から映像文化活動の発信をすることができたと振り返っています。

あらためて、お忙しいなかゲスト出演を快諾してくださった是枝監督をはじめ、今回の上映会に関わられたすべてのみなさんに感謝・御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

とくに意義があったのは、観客と作り手による対話の場を設けられたことです。第2回上映後の是枝監督によるティーチ・インはホールが満席となり、客席から多くの質問が投げかけられました。撮ることになったきっかけや劇場公開されるまでのこと、撮影中のできごと、編集上のことなど、この作品の観かたがさらに広がる多くのヒントに満ちた内容が語られました。なかには「是枝監督はCoccoさんのような女性はタイプですか？」との質問も。ときに笑いも交えながらの充実した時間は、あっという間に過ぎていきました。

また、会場ロビーでコメント・メッセージを募集した「想い事」企画にも、200名を超える多くの方が参加くださいました。この企画は『大丈夫であるように』にも登場する、短冊状のカラフルな布に、作品を観てそれぞれが思い浮かべた言葉や感想などを自由に表し、みんなの想いをつなげるという趣旨で行ないました。集めた「想い事」の取扱いを考えた結果、企画担当者である僕が自分で沖縄・辺野古まで届けてくることにし、みなさんに呼びかけることに決めたのでした(※)。



いよいよ僕自身の旅、出番が近づいてきています。来る6月20日、真剣に綴られた言葉たちを、文字通り「抱えきれない」ほどたくさんのメッセージを、沖縄・辺野古の浜辺に届けてきます。予想していた以上にたくさんの想いにつながったことに、いまも驚いています。僕が「なにか行動を起こしたい」と思ったように、ご来場くださったみなさんにとっても『大丈夫であるように』が「まずなにかを表現してみよう」「見過ごしていたことに目を向けてみよう」…と考えるきっかけになったのだと思います。この作品で初めてCoccoに出会ったひとも多くいるはず。感じ方や表現の手法はさまざまでも、Coccoから受け取ったことをどうやって流さずに自分自身に留めておくのか…。それを確認し続けるために、僕たちには「終らない旅」が必要なかもしれないですね。まず沖縄に向かう僕の「旅」は、これからどうつながっていくのでしょうか？『大丈夫であるように』はそのスタートとして、忘れられない作品になりました。

(文/山口渉)

(※)「想い事」企画については、TAMA CINEMA FORUM 映画祭Blog記事「『大丈夫であるように—Cocco終らない旅—』上映会に寄せて」(2009.4.18) http://www.tamaeiga.org/blog/2009/04/cocco_4.html に詳細を掲載しています。

『大丈夫であるように—Cocco 終らない旅—』

監督:是枝裕和 107分

配給:クロックワークス

<http://www.dai-job.jp>



6/13『1/4の奇跡』上映会報告！（ブログ総まとめ版）

●「1/4の奇跡～本当のことだから～」上映会が開催されました
上映会の余韻を残したまま、少しずつ時間が過ぎていきます。

6月13日、会場に足を運んでくださったみなさま、
不行き届きの面もあったと思いますが、「1/4の奇跡～本当のことだから～」を
ご鑑賞いただきまして、本当にありがとうございます。
心よりお礼申し上げます。

従来の企画は、昨今のロードショー公開作品の中から
映画ファンに評判の高い作品を取り上げることが多いのですが
今回は一個人・一人の人間としての立場で、観てそして感じていただきたい、
そんな作品に出会いましたので、自主上映会を中心に展開を広げている
この映画をぜひひと提案し、企画を進めてまいりました。
また、会場設備がバリアフリーなので車椅子をお使いの方々にも
ぜひお越しいただきたいの思いも強くありました。

正直、入場料については障がい者割引を適用しようかと迷いましたが、
この作品は姿・形がみんな違っていても大丈夫、一人一人の命や心は
同じように大切なんだというテーマが含まれてあるので、
みんな同一料金にさせていただいてもいいのではないだろうか、
ただし、お一人で行動するのには支障があるお客様には
付き添いの方1名は無料の条件は必須だと、
いろいろ思案しながら設定いたしました。
この点につきまして、私どもの想いを快く受けとめていただければ幸いです。

第2回目の上映では、会場内に車椅子が5～6台並び、
そのまま鑑賞していただくことが出来て何よりでした。
鑑賞中は、場内みんなの気持ちが一つになって繋がってくださったように思います。
終了後、会場を出てくるお客様の表情は一律に清々しく感じられました。

映画の中の雪絵ちゃんの願いのとおり、
「障がいがあるとかないとかじゃなくて、誰もがみんな大切だということ、
それが世界中の人が当たり前に知っている世界にしてほしい」
この作品が少しでもそんな世の中に近づききっかけとなれば嬉しいですね。

ここで、ご覧になった方の感想文の中から、ご本人に了解いただいた上で、
ご紹介させていただきます。

親子でお見えになったようです。1枚の用紙にお二人で仲良く書いてありました。

「とてもいいえいがだった。
人と人はつながり合っているんだなと思った。
人：この世界にいる全員がとてもだいじなんだな—と思いました。
ほくは雪絵さんが最後の力をふりしほってかっこさんを
かんこくにくいのをとめたんだな—と思った。
大すけ君や雪絵さん、人の力はとてもすごいなと思った。

* * * * *

小4の息子と一緒に観ました。
分かるかな？途中であきないかな？という心配もあったけれど、
一緒に観たかったので仕事の後合流して急いで来ました。
すごいメッセージがいっぱい詰まっていました。びっくりしました。
でも、昔からそういう事なんだ、私知らなかっただけなんだ…と思いました。
息子もいろいろ感じていたようで来てよかったです。
以前観た映画もとてもよかったです。
次回も楽しみにしています。ありがとうございます！」

こちらこそ素敵な感想をありがとうございました。

●「1/4の奇跡」岩崎靖子さんゲストトーク
先日上映会の中で行われた岩崎靖子さんのゲストトークの
内容をお伝えします。（一問一答）

Q. 岩崎さんは、普段は関西を拠点に活動されていますが、
最近では上京の機会も増えているようです。
東京の印象は？

A. 実は東京に対してコンプレックスを持っていて、
京都に住む人間としては、東京はたくさんの方がいて、
日本の中心ですごいなあと感じます。いつも緊張しながら来ています。
エスカレーターのとび方が関西と左右逆でいつも間違えてしまいます。（笑）

Q. 京都のご出身ではなりした印象の岩崎さん。
ナレーションでも柔らかな話し方で作品にとってもマッチしていましたが、
以前そのような経験をお持ちだったのですか？

A. 特にナレーションの経験や勉強をしたことはありませんでした。
どうしてすることになったかと言うと、
プロのナレーターを頼むと費用がかかるので、
それならば私がやってみたくて申し出ました。
元々人前で話すことが人生で一番怖くて、克服するために
女優にチャレンジしようと劇団に入り、発声練習などをしたことはあります。

Q. プロデュース・コーチという言葉は聞き慣れないが、どういった役割でしょうか？

A. プロデュース・コーチという言葉は、一緒に映画制作に関わった 小野敬広さんが
名付けてくれました。
「コーチ」という職業は最近存在していて、「カウンセラー」に近いものだが、
コミュニケーションを通して 相手の夢を明確にしたり、実現に向けて会話しながら
サポートしていく役割を「コミュニケーション・コーチ」と言います。

小野さんと次回作を何にしようかと相談していた頃、
「この宇宙に感謝の量を増やす映画を作りたい！」と突然彼女から不思議なメールが来て、
私は目が点になりました。（笑）
何だろう？？？と思いましたが、直感ですごく面白そうだなあと感じて、小野さんと3人で
喫茶店に集まり映画作りをスタートしました。

開始早々、入江監督のパワーに巻き込まれる形で始まったが、3か月を過ぎたあたりから
それぞれの役割の名前を考えようということになりました。そして、小野さんの提案で
入江さんは言いだして「監督」小野さんは撮影・編集に関わる「映像技術」そして、
自分は入江さんの想いを映像で実現させようとする中、会話でサポートすることが多いので
「プロデュース・コーチ」と決めました。

Q. 「宇宙に感謝の量を増やしたい」との思いがたくさん入っているが、岩崎さんから見
て入江監督が一番訴えたかったシーンは、どの場面だと思われますか？

A. ラストの、村上先生・昇先生・かっこちゃん3人が登場する会話のリレーシーンを
物凄いです。
実は3人は、バラバラに話をしてもらって、一切こちらからは話の内容や言葉を要求
しなかったのですが、ただ話すだけのことがどんなふうにも繋がるのか気になっ
ていたところ、入江監督から連絡があり、その出来あがったインタビュー映像を観た瞬間に
涙が溢れて止まらなくなりました。
まるで、3人が打ち合わせをしていたかのようなすばらしい繋がりや心に届く内容でした。
これは入江さんの伝えたい思いがインタビューの相手にも伝わって、神がかり的に
作り上げられたシーンのような気がします。
そこが、一番入江監督が伝えたいところだと思います。

Q. 今日は、わざわざ関西から、もう一人のメンバー小野敬広さんも
お見えになりました。一言おねがいします。

（小野敬広氏登場拍手）
A. みなさん、今日は観に来ていただいてありがとうございます。
私は、「1/4の奇跡～本当のことだから～」で基本的には
映像の技術的なところを担当しました。
撮影したり、編集したり、ふ～ちゃん（入江監督）に編集機の扱い方を
指導したりしました。
元々は岩崎さんと2人で映画制作をやっていて、ふ～ちゃんという
とんでもない人（?）を紹介してもらったのですが、
とてもとても不思議な女性で、やりたい放題・元気いっぱい
素敵な人だな～と思いました。
当時はいろいろと問題もありましたが、今振り返ってみると、
自分で考えたり感じたりしながら人と人との関係ですごく勉強させてもらって
やって良かったなと思っています。
ありがとうございます。
（拍手退場）

Q. 再び岩崎さんに伺いますが、映画に出演された山元加津子さん
（かっこちゃん）についてですが、取材中接した中でどんな方でしたか？

A. かっこちゃんは映画のまんまの方です。
ふつうは障がいを持ったお子さんを見かけると、
「障がい児」というレッテルを貼って接してしまうと思いますが、
彼女にとっては、そういうものがなくなったその人が存在しているだけ。
「障がいを持った」ではなく、だからこそ
人物そのものの素晴らしさや能力が見えてくるんだなあと感じます。
そして、本当に優しい人で、この前関西で豚インフルエンザが流行した時に、
不足しているマスクの心配をして、地元で必死に探してくれたり、
自分で作ろうとしてくれたりしました。
でも、やはり彼女も不思議な人で、一日で撮影が終わらなかった時のこと、
「大丈夫！明日の朝5時半に始めましょう！」。スタッフは「5時半・・・」
とびっくりしながらも、眠い目をこすり撮影したこともありました。
普通の枠を超えた考え方をいっぱい持っている素敵な先生だなと思います。

Q. 以前から彼女は執筆や講演活動などで知られてはいたようですが、
この映画によってさらに一般の方にも顔が徐々に知られるようになったと思うが
その後の生活に変化はありませんか？

A. 講演依頼などが増えて忙しくなったとは聞いていますが、彼女にとっては
子供たちのことを伝えたいっていつも思っているのだから、映画が広がって、
もっともっと伝える機会が広がって嬉しいと言っていました。

Q. 子供たちのどんなところを知ってほしい、伝えたいとお思いでしょうか？

A. 彼女が伝えたいと私が思っていることは、
障がいは個性であってみんな同じ。
ただ人よりある部分においては出来ないことがあるだけ。
それは私たちも同じで、苦しい事は誰にでもある。
何を基準に「障がい」と決まるのだろうか。
言ってしまうとみんな障がいを持っていることにもなるし、
ないことにもなるし・・・。
みんなが同じだし、みんなが大切な存在であること

とにかくそれを伝えたいのだと感じています。
2009.6.13(土)ペルブホールにて



誌名：DVU（だぶ）

発行号数：2号

内容（最新号より）：

- ・漫画家・アニメーション作家・映画監督 新谷尚之インタビュー
- ・浅井隆インタビュー
- ・西村隆インタビュー など

取り扱い先：タコシエ

ポレポレ東中野

ジュンク堂池袋本店 9階 芸術書フロア
 法政大学市ヶ谷キャンパス生協
 法政大学多摩キャンパス生協
 早稲田大学戸山キャンパス生協 など

ブログ：<http://d.hatena.ne.jp/dvu/>

連絡先：DVU編集委員会

duv_davu@hotmail.co.jp



誌名：映画時代

発行号数：2号

内容（最新号より）：

- 【インタビュー】鈴木則文（『関の彌太ッペ』チーフ、『兄弟仁義』『緋牡丹博徒』脚本）～東映京都撮影所の“兄弟仁義”～
- 【寄稿】山下耕一郎（山下耕作・長男）ラピュタ阿佐ヶ谷“山下耕作ノ世界”（11/9～12/20）上映作品一挙レビューなど

取り扱い先：青山ブックセンター

ディスクユニオン新宿本館 映画フロア

タコシエ

ラピュタ阿佐ヶ谷

ポレポレ東中野

など

ブログ：<http://eiga-jidai.seesaa.net/>

連絡先：eigajidai@gmail.com



誌名：Spotted 701

発行号数：9号

内容（最新号より）：

- 特集1『SR サイタマノラッパー』
- *みひろ（女優）グラビア&インタビュー with 入江悠（監督）

*北（関東）の国から2009-Fuckin' Culture Catalog & Column-
 BOOWY/頭文字D/赤い疑惑/U字工事/ など

取り扱い先：シネマ・ロサ（池袋）

ポレポレ東中野

青山ブックセンター本店

ヴィレッジヴァンガード下北沢店 など

URL：<http://www.spopro.net/spotted701.htm>

連絡先：spotted701@gmail.com



誌名：TRASH-UP!!

発行号数：3号

内容（最新号より）：

- 特集1 ダリオ・アルジェント 全作品解説&国内版未リリース 『4匹の蠅』シナリオ翻訳
- 少女マンガとアルジェント、日本のアルジェント系映画を探せ
- 特集2 大韓トラッシュ など

取り扱い先：タコシエ

タワーレコード新宿10F

吉祥寺バウスシアター など

ブログ：<http://trash-up.blogspot.com/>

連絡先：kuzuyama@gmail.com

そもそも映画ZINEってどんな雑誌？

映画zineはDIYの夢を見るか？



映画 zine なるものが最近隆盛を見せているという。ここ一年程で『DVU』、『Spotted701』、『TRASH-UP!!』、『映画時代』と四誌もが創刊している。

「zine? それって(先号の特集で紹介した)DIY文化の一つじゃん!」

という訳で DIY 精神をモットーとする本誌。これは話を聞かねば! という訳で『DVU』、『Spotted701』、『TRASH-UP!!』、『映画時代』の四誌に取材を決行してきました。と、その前に zine の説明を少しさせてもらおうと「zine」とは個人、あるいは有志で作る雑誌のことである。

「それって同人誌とかミニコミでしょ」

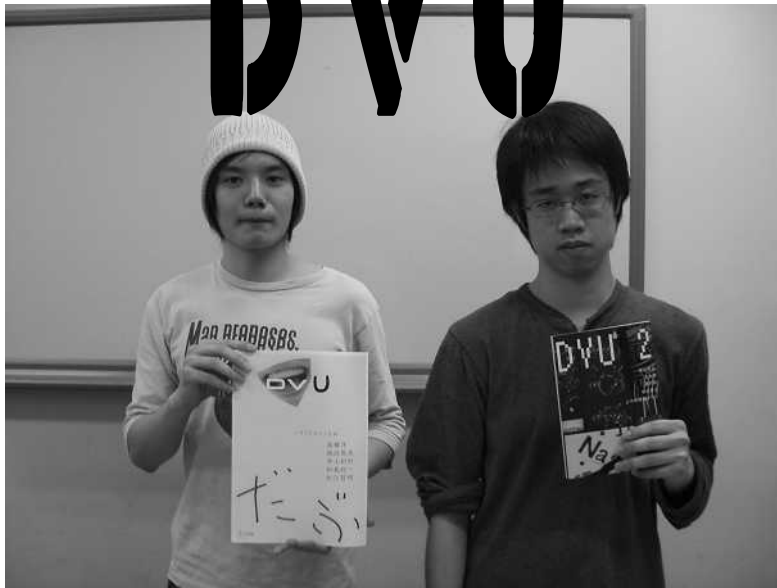
ん~、ま~、そう取ってもらってもハズレって訳じゃないけど.....、ハズレじゃないんだけど..... それだけじゃないんだよね、と言う.....。zine 文化ってのが昔からあって最近、密かに盛り上がっている。zine 専門のネットショップなんてのもあるし。詳しく言うと長くなるんだけど、とにかく DIY 且つ自由な個人雑誌、という事で本誌的にはいく。

で、先に取材した感想、というか反省から言ってしまうと、こちらの質問設定が甘かったので特集の意図が少しブレてしまったかな、という。読めば判るのだが唐突に「商業主義とかどう思いますか?」みたいな質問が出てくるので結構、皆さん「?」という感じになってしまったり.....。要は上手く「DIY文化」と絡められてないのだが、各誌のインタビューを読めば「DIY文化」との共通項を見出す事は出来るのではないかと。ま、別に各誌を括弧付の何かに押し込めよう、という意図はサラサラ無いし。というか各誌が目指す所の多様性を提示できればそれでオッケーかな?

と、強引にまとめた所で各誌のインタビューをお届けしよう。

(取材 松田・佐藤/文責 松田)

DVU



『DVU』は法政大学の学生が中心となり運営されている映画 zine である。2009 年 6 月現在で、2 号出ている。所謂、自主映画に対しての非常にこまやかなフォローが特色と言えるだろうか。今回は編集委員の中心的存在である中山洋考氏（写真右）と滝本龍氏（写真左）に話を伺った。

それでは自己紹介をお願いします。

中山 DVU 編集委員をやっております中山といいます。

滝本 法政大学の 2 年滝本と申します。昨年度から『DVU』には関わらせてもらってます。

中山 あとは法政大学の学生を中心に 10 人くらいで動いています。

『DVU』の発行を思い立った経緯は？

中山（法政に）いくつか映画サークルがありまして、その代表が集まった映画団体協議会と言う、部室使用のスケジュール管理など事務的な事柄を行う調整機関があって。そこで上映の企画なんかもうっていて、その中の企画の一つに井土紀州^{註1}監督のシナリオワークショップをやった事があって、その際に井土監督との交流が生まれました。その翌年、井土監督のラザロの上映にスタッフとして関わらないかと言う話を貰って。そのときに多くのゲストを呼んでいて、打ち上げとかに参加してゲストで来られていた高橋洋^{註2}さん、松江^{註3}さんなんかの話を聞いていて「こういうの纏めたら今までやってきた上映活動の記念になにか作ったら面白いんじゃないのか」と言うのが始まりです。

作るう、と言う企画から実際行動に移すのは距離が

あると思うんですが？

中山 上映の企画とかは結構気負わずにやっていたので、ある意味それと同じノリで作った所はあって。なれない作業だったので井土監督に（編集として関わった『重力』^{註4}の時の経験を）相談しに行ったりとか勝手パンフの松島政一さん^{註5}にアドバイスを聞きしたりと言うのはありましたが。

滝本 自主映画に関わった人は寛容というか、気軽に手伝ってくれる人が多かったですね。

方向性というのうは考えてました？

中山 1 号目の時ははそもそも学園祭に向けての豪華なパンフレットを作ろう、と言う感じだったのであまり考えてなくて……そこから長引いて学祭は全然超えてしまったんですが（笑）記念というかサービスと言うか（笑）そういう感じで作ったので、本当に方向性について考えさせられたのは 2 号目からなんですけど……。でも、ちょっと方向性を提示できるか、というのは微妙でして……やるなら他とかぶらないものをやりたいなっていうのはあるんですけど。

突っ込んだ事を聞きますけど、資金とかはどういう風に？ 装丁などもしっかりしてますが？

中山 編集委員からのカンパと僕のポケットマネーというか、2 号の時は 1 号の売上も加えて……。

滝本 中山さんのバイタリティーにノックってる部分があると思います。（ここで編集委員滝本氏から中山氏に質問）僕から聞きたい事があるんですけど、紙媒体にこだわるっていうのは何かあるんでしょうか？

中山 立派な形で出したい、というか注目されるには形

を整えた方が良いかな、というのと、ネットだと手ごたえが判んないし……。

何部くらい作ってるんですか。

中山 1号は300部で2号は600部です。

最初は学内のパンフレットとして構想していたとのお話ですが現在は学内に留まった形の活動ではではないですよ。

中山 井土さん、松江さんに発破を掛けられたと言うが……覚えてるのは松江さんには「名刺代わりに渡した方が良い」と言われたり井土さんが「色々な店におけるようなもの作った方が面白い」といわれたり……

収支とかはどうなんですか？

中山 1号目は完璧な赤字です。2号はめはトントンになれば良いな、という…

売り切れれば黒字なんですよ

中山 2号は出ます、1号目は売り切っても黒にならないという……

滝本 見切り発車的な……

計算とかはしなかったんですか？

中山 全然しなかったですね。

素晴らしいですね、急に話が大きくなりますが、商業主義とかがどう思います。

中山 商業主義とかに対抗しようと言う気持ちは別に自分には無いんだ、っていうのはあって。まあ、でもそういう「ビジネス」って事を気にしてない人の方が話を聞きやすい、みたいなものはあったんですけど……「商業主義」っていうのもかなり漠然としちゃうんで……。そういう（マーケティング分析的な）「客層」を狙った広告とかを観て「ああ、そのとおりだ」「面白い」って言ってそういう作品を受け入れてしまうと言う事が本当に存在するのかわからないんですけど、そういう所からズレた作品というので面白い作品というのが届けづらい状況なのかな？と思ってしまう所はあります。だからってそういう作品の方が重要なんだ、と言う自信は無いんですけど……

滝本 見る側、批評する側としては商業作品であったり自主映画であったりしても全部同じ地平にして言説を与えていければ……CMを何度も何度も流したり、テレビで特集組んだりといったメディアミックスをして、映画の紹介番組とかでも（その）テレビ局製作の大作に偏重してたりして、一般的に考えても不健全さがありますよね。大手のシネコンしかないような地域で多くの作品が見捨てられてマス向けのものしか供給されない、っていうのはあるとおもいます。

他の『映画時代』『Spotted701』『TRASH-UP!!』とかは共感とかはありますか？

中山 頑張っているしやるな、というか、素晴らしい行動力の方々だな、と思います。なんか並べられて引け目を覚えるというか(笑)。

他の三誌（『映画時代』、『Spotted701』、『TRASH-UP!!』）とかの内容は意識とかしますか。

中山 あるっていえば、ありますけど……

（その三誌と）交わっていきこう、みたいな気持ちはあるんですか？

中山 このままにも意識せずやっていたら多分混じわるところはないだろうな、という……それぞれ個性がありますし恐れ多くも交じわるとしたらバクルしかないだろう、という(笑)

作る上の苦労みたいなものは？

中山 大変といっても、他の人も大変だと思いますから。大変じゃない人間なんていないという(笑)

そういえば名前の由来ってなんなんですか？

中山 『CUT』を一字ずらすと『DVU』になるという……

滝本 『CUT』に対抗しようという(笑)

2001年宇宙の旅の『HAL』みたいなもんですよ。

中山 それが最悪だな、という(笑)浅はかな事をやったなという……

今後の展望とかは？

中山 三号はだいぶ後になりますけど動いています。四号以降は真張り次第で……ま……頑張ってる(笑)

今後4号といわず、10号20号～と続けて欲しいのですが。

滝本 もう商業誌になって。ロッキン・オンとかも最初はファンジンだったのが自社ビルとか建てて……

では、末は渋谷陽一で。

滝本 映画批評界の渋谷陽一(笑)

中山 ……まあ、ま……いいや……(一同笑)

註1 映画監督・脚本家、作品には『百年の絶唱』、『ラザロ-LAZARUS-』等がある。

註2 映画監督・脚本家、作品には『リング』、『狂気の海』等がある。

註3 松江啓明 映画監督、作品には『童貞。をプロデュース』『あんによん由美香』等がある。

註4 井土氏が参加する批評誌。02号では責任編集を務めた。

註5 松島出版・現代映像研究会代表、「個人が勝手に作るパンフ」をコンセプトにピンク映画やインディーズ映画のパンフレットを作ったり自主上映を行っている。

映画時代



『映画時代』は佐藤洋笑氏(写真右)と港岳彦氏(写真左)からなる活激プロダクションが発行する映画 zine。創刊準備号も含めれば3号出ている。今回の特集で取上げた zine の中ではもっとも正統派、と言えるのではないだろうか。上の写真から判るようにやさぐれ(笑)っぷりもカツドウ屋然としている活激プロの両人に話を聞いてみた。

では自己紹介からお願いします。

港 一応、職業欄があったら脚本家ってかくんでけどそれだけでは食えてない、というありがちな人間です。

佐藤 むかしはプロの編集なんですけど今はセミプロって感じです。

では早速ですが、『映画時代』を作るきっかけというのは？

港 07年の暮れに飲んでる時に「何かをやんなきゃな」って話になって。自主制作の映画とかやる、って言ってやらないって言うのが十何年続いていたんで。こういうのならお金もかかずに出来るんじゃないか、って話がまとまったという。

佐藤 伏線はもっと長くなるんですけど、『ロック画報』という雑誌を足掛け7年やってたけど、二人だけでやっていたのでだいぶ疲弊しちゃって終わりにしたんです。そこでその雑誌を終わりにして一年ほど休んでいたんです。で、そろそろ何かやりたいな、と言う時に港君が『イントロ』と言う(映画批評の)サイトで書いて、そういうものをもうちょっとちゃんとした形にし

たいな、と言うことを言ってる。『ロック画報』、『イントロ』っていう履歴があって、港 手の内が判ってる人たち、というか。どういう文章を書いて、と言うのが判る人達がちょうど集まったというか。

佐藤 港君が最初に言った時にインディー的なもので良い、と言う所で結構心引かれて。『ロック画報』は良い所だったんだけど、途中から表紙のデザイン一つにしても凝り過ぎてると営業の方で「配本にまわせない」云々と、僕の付き合いだけでない雑誌だからそれほど好みでないものも仕事としてこなしたり、とかいう経験もあったんである程度好きに出来る、という事とかにも惹かれた。

港 既成の映画雑誌に腹が立ってたとか、映画評論が嫌いだったとか、だけでやったんじゃないけどそういうのが漠然とあって。100%ではないけど、最終的なモチベーションは自分自身って事になるんですけどね。
佐藤 ほんとはもっと若い時にやってたらよかったんだけど先に仕事で(編集を)やっちゃってたから、逆に会社頼みじゃなくやるというのがカッコ良いなと(笑) まだまだがんばってるなって(笑)

商業主義とかに対してのカウンターって意識とかって有ります？

佐藤 商業は否定しないし『映画時代』も回せるお金を作って参加してる人にも微々たる御礼をしたい、という目標は有るんですよ。ただデザインとかに良く判らない所で制約がかかったり、ちょっと色んな本屋に置きたい

と思うだけで(流通などの)間で金抜かれる、とかに対しての憤りはありますけど。

他の同時期に刊行されたzineとかどう思います？

港 スタンスが全員違うと思うんですよね。『TRASH-UP!!』とかは違うことをやってるし、『DVU』の中山さんなんかも読んでスタンスが違うなって、って別にいやらしい意味じゃないですけど(笑)。直井さんは僕『Spotted701』に書いてるんで競合しなきゃいいなって(笑)。僕、実を言うと直井さん意外知らなかったんです。他のお二方は申し訳無いけど『映画芸術』で座談会をやってそこで始めて知った、という(笑)。だから別に意識してはなかったという。知らなかった、と言うのが正直な所です。みんな意識してないと思いますよ。**佐藤** 『DVU』の中山さんとかは見に行く映画で会ったりして。

港 中山さん、必ずいるんですよ劇場に(笑)

佐藤 (嗜好が)拡散しちゃてるから。まあ、言いたがりの人が出てくるようなシンクロニシティは感じましたよね、もう映画とか(の枠組みだけ)じゃなくて。

港 あ、でも『映画芸術』は敵だ」というのだけは書いておいて下さい(一同笑)。

受け手の視線を大切にしよう、みたいなのはありますか。

港 僕個人で言えば映画の中で映画を語ってしまうのが面白くないというか。違う所に行きたいというか。閉じたものが嫌なんですよ。すごい話し飛びますけどウチの師匠の馬場^{註1}さんが松竹大船の人で、その時代の話の本にまとめようとして。この間、原稿朗読するから「お前聞けよ」って呼ばれて行ったんですよ。伊豆とかの旅館に一、二ヶ月閉じこもってホンを作るって言う話なんです。で脚本がいかに出来上がるのか、という話だと思ったら「その女中とヤった」とかなんも関係ない話を延々と書いて、すごい面白かったんですよ。映画人の話だから脚本がいかにして作られるという技術論、ゴシップ的なもの、そういうのも面白いと思うんですけど、それだけだと読んでおわりだなって。でもそこで「女中がいて」「その女中が色っぽくて」って言う話になると身を乗り出しちゃうという。「映画」っていうものを入口にして「ドラマ」というか「文学」が出てきた時が一番面白いと思うんですよ。僕個人はそういうのを『映画時代』でやりたい、とは漠然とは思ってるんですけど。

越境したい、っていうか.....

佐藤 その気持ちはあって、世の中とか文化とかは

広いと思ったんですよ。昔は「映画も好き」「音楽も好き」っていうのは平行してあって、心が豊かだったような気がするんですよ。でも今、映画好きの人と話しても他に(話が)膨らまない。他のジャンルに詳しい云々、とかじゃなくてもっと全般に世の中を楽しめる、というか、そういう感性が磨り減ってるんじゃないか、という気持ちはあるんですよ。僕の担当する記事はどっちかというマニアックだったり、裏話を聞いてくる系だけど、「こんな面白い人たちが(作品を)作ってるんだよ」というのを根本にインタビューをやってると思いますけどね。

作るのは大変でしょうか？苦労とかは？

港 大変は大変だけどそれ以上に面白い。

佐藤 大変な思いもしたけど、それ以上に色々な人と話す機会とかがあつて良かったな、っていう。

大体、何部くらい出してますか？

港 えっと.....、大体700位。

次回の予定と今後の展望は？

港 今、VOL3に取り掛かっている所で。まあボチボチやってる感じで。

佐藤 なんとなくこれやりたい、みたいので盛り上がってる特集のネタもあるんで。そろそろエンジンかけようという感じです。

港 いろいろ考えるんですけどねえ、コレやったら超売れるとか(笑)一応考えるんだけど「アレ？外したみたいな」(笑)

佐藤 戦略を考えてるようできて楽しい方へ楽しい方へ流れていくんですよ(笑)。で、五年位したら若い子達に(『映画時代』を)譲って俺たちは「最近『映画時代』もぬるくなったな.....」とかいうね(笑)

港 それが最大目標(笑)まあ、考えてもしようがないトコありますけどね。生ものなんで。いかに時代と関わるか、みたいな。出来るかは別としてそこを考えなきゃいけないな、っていう。

佐藤 港君の今の話聞いて思ったけどそのときのノリだったり、空気とかを封じ込めるというのが、本とかに惹かれていて、(本という)形に残しておきたいのかも。

最後に何か一言

港 『映画芸術』追悼号出すからな、という、以上です。

佐藤 恋人絶賛募集中という事で(笑)

註1 馬場当 脚本家、松竹脚本部。作品は『復讐するは我にあり』と多数。

SPOTTED701



『Spotted701』とは、SPOTTED PRODUCTIONS こと、直井卓俊氏が発行する映画 ZINE である。創刊は一番古く 07 の 7 月からすでに VOL.9 まで出ている。基本的には SPOTTED PRODUCTIONS が関わる作品のパンフレットの的な性格が強く、直井氏の名刺代わり、とも言えるものである。『Spotted701』の名前の由来も 701 = ナオイだ！

— まずはご自身の自己紹介を

直井 栃木県で生まれまして、大学でこっち（東京）にでてきて、下北沢のドラマという古本屋でずっとバイトしてたんです。気がついたらものすごいマンガに詳しくなってきた。まんだらけでちょっと働こうかなと思ってその道に行こうかと思ってたんですけど。でもまんだらけ（で働く人達が）いやで（笑）。その間にアップリンクが募集していて、面接を受けたんです。DVD のセクションの募集で僕が次点だったんですけど、何か僕の前に合格した人が一日でやめたらしくて。それですぐ連絡が来て、「明日から働けるか？」なんて言われて、「はぁ……」という感じで行って、気がついたら 4 年半も居たんですけど。

— では『Spotted701』を作る切っ掛けは？

直井 あれは単にピンクの特集のパンフレットを作るのがきっかけで。ピンク映画を紹介するものがなかったんで何かを作ろうとして、ただで配るチラシだとそのまま捨てられちゃうかもしれないから、パンフレット作って売ってしまおうと。

DIY 的な発想ですよ。

自然とそうなってるところはあるかもしれないですね。僕らにはこのやり方しかできない、っていう。メジャーな会社の仕事とか受けたときにずれちゃうんですよ、こちらのやりたい事と。例えばイベントとかやるにしても話す順番とか、立ち位置とかの進行表をつくれとか。作らなかったら「やる気あるのか？」って怒られちゃって。自分達でやるときはラフなんです、自分たちで打ち合わせできてればいいじゃんって。形式的なことが無駄だな、って思っちゃったんですよ。雑誌媒体にああしてこうしてみたいな。それよりもっとせっかちにネットに色々書くとか。動画撮って Youtube にあげちゃうとか。大きいところになるとそういうことができなくなっちゃうんです。チェックがうるさいし、女優さんがその話は聞いてないとかどうでもい話になっちゃうんです。こういうのいくらでも自分達の発想で出来るんですよ。クチコミと熱が重要になって。僕の関わる映画ってそういうのが当たりますね。たまにいますですよ。作るだけ作ってボンと配給に預けちゃう、っていう（監督が）別に人に見てもらわなくても良い、みたいなの。

同時期にいくつかの映画 zine が出たという現象に何か意味はあるんでしょうか？

直井 いやないですね。たまたまです。

（『TRASH-UP!!』）屑山さんが言うには印刷代が安くなったからじゃないか？との事なんです（笑）

直井 ああ、それもありますよ。こんなに安くできるんだって思いましたよ。32 ページ、1000 部で 12 万円くらい。700 円設定で 200 冊売れば OK という感じで作

ってます。

全部附けたっていうのはありますか？

直井 『童貞をプロデュース』の特集号は捌けましたね。売れる場所が多かったんで。本屋で流通してるわけじゃないから、イベント(売れる場所)がいかに多いかっていう。1000冊売り切るってことは滅多にないですね。だから600、700がいいところ。全部黒字にはなってます。売れない時でも200から300の間はいくんで。

他のzineに共感とかは？

直井 ありますよ。誰にも言われる訳じゃなくて自発的にやってるものなんで、「終わらずに続いていければな」って。みんな頑張ってるなって。『TRASH-UP!!』が一番近いかもしれないですね。ライブイベントがあったりとか、CD付けたりだとか。でもやってる事は全然被らないんで。『映画時代』とはスタンスが全然違いますし。

協力しあったりとかはありますか？

直井 『DVU』の中山君とかは上映を手伝ってくれますよ。うちの関わる映画のときには見に来てくれて『DVU』でも取り上げてくれるっていう。発信してるものがあるんで協力してくれますね。(『映画時代』の)港さんは脚本家だったりするんで、彼の作品が上映されるときには僕も手伝ったりしますし。あと港さんは信頼しているのでライターで書いてもらったりして。眉山さんと僕ぐらいじゃないですかね。平行してクロスしないのは、互いに知っているけどあまり接触がないのは。でも眉山さんは妙に僕の事、意識してくれてるみたいですけどね。青山ブックセンターとか行ったら、この間『TRASH-UP!!』の人が来てどれが一番売れた、なんて聞かれて『Spotted701』ですって言ったら「クソッ！」て(笑)。(『TRASH-UP!!』は)アマゾンとかで流通出来て、そのノウハウを聞こうかな、とか思うんですけど、やっぱりメンド臭くて出来ないなと。だっていま雑誌儲からないじゃないですか。こんだけどんどん畳まれてく時代に。

そんな時代にzineが出てきて……

これ成り立つんだってことが分かったんで。でもこれってたぶん続けてかなきゃだめなんですよ。苦しくとも。でも帳尻合わなくて辛くてやめたいとかはないですね。作るの辛いんですけど。やっぱり面白いですよ、作るのって。ネットで消化するのとは違いますね。紙に残ってくつか、取り返しつかないじゃないですか。

既存のものに違和感があった？インディーズ精神というかそういうのにこだわりはありますか？

直井 考えたことないですけど、面白いと思ってること

がインディーズ精神なんでしょうね。発想は自由に大胆にやれる状況っていう。やっぱり『童貞。をプロデュース』が大きかったですね。やってやれない事はないんだ、っていうか。予算の大小は関係ないんだ、っていう気がしましたよ。自主映画でも、本当に。人件費とかは実費。

そういう商売+の部分は大事にしている？

直井 インディペンデントでやる時にお金に目がくらんじゃダメでしょうね。「金に走ったんだな、アイツら」って。『童貞~』のソフト化に関して「気持ち揺れるくらいは、言われる事ありましたよ、大きいメーカー来た時に。そりやお金は豊かになったほうがいいし、でもそれで終わっちゃうかもしれないじゃないですか。まだまだ可能性があるんだし、その分頑張るじゃないですか、こっちも。

では最後に今後の展望は？

直井 『あんによん由美香』と『ロボ芸者』とそして『ライブテープ』。年内はその三本の(配給)でいっぱい。年に1本くらいは制作やってみたいと思うんですけど、無理ですよ。定期的には。あと僕の展望というか、希望としては配給とか宣伝の部門で若手で面白い人が出てくることですね。上映の企画とかで。そういう人がいないんで僕に集中してるだけです。面白がってイベントやったり、映画祭立ち上げたり、だとかいていいんじゃないかって思うんですけど。僕らの上だったらしまだ(ゆきやす)^{註1}さんとかいるわけだし。下はないですよ。お客に向けて見てもらって完成みたいな人が少ないですね。

受け手が見えてない、っていう感じなんですかね？

直井 何か意識感じないですよ。あまり。

直井さんは常に受け手の事を考えてコミュニケーションを取ろうという意識がすごくあるんですよね？

直井 お客にとって「これはどうだろ？」って常に疑う。松江とか井口さんっていうのはホントお客さんの事を第一に考えてますね。自分自身が映画ファンですよ。お客の立場としての気持ちを持つてるから。井口さんだったらサービス精神、松江も(作品を)届けたい、っていう。お客が絶対感動しないと気に入らない、っていう。だからみんな試写の後すぐ聞きますよね、「どうだった？」って。

註1 イメージリングス代表、配給・製作・上映の企画等を行っている。

TRASH-UP!!



最後にお届けするのは『TRASH-UP!!』である。「トラッシュカルチャー」という聞きなれないジャンルを扱う zine である。zine と形容はしたものの現在の『TRASH-UP!!』は「雑誌」という括りの方がふさわしい。だが創刊当初は zine 形態だった事、又、そのバックグラウンドには zine カルチャーや DIY 精神への共鳴が感じられるので、「トラッシュカルチャー」の事も含め、代表の肩山氏に話を聞いてみた。

では肩山さんの自己紹介を。

肩山 3月31日付で会社辞めたんですけど、

『トラッシュマウンテンビデオ』[※]ですか？

肩山 それはその前ですね。最初僕が入ったのは、そのトラッシュマウンテンのエプコットっていう会社に入って、そこは映画の配給とビデオを出すっていう。僕が最初に担当させられたのは洋ピン、しかもパロディものっていう特殊なジャンルで、タイトルとか決める作業をいきなり任されて3年間位それをやっていたという。『フェラディエーター』とか『ハメナプトラ』そういうのを毎日書いてた。

楽しそうですね！

肩山 拷問でしたよ！（笑）駄洒落とかダメで（笑）でもう限界、と思って。3年目位であまりにもそれが辛いんで、辞めようと思って（笑）。とおもったらDVDが出てきて（DVDを）やろうって事になって。で企画を出してくれ、ってなって。日本で公開されてない、古いホラーだったら権利金も安いし、注目もされてないか

らって、始めたのがトラッシュマウンテンビデオっていう。ちょうど海外でもユーロトラッシュ（ブーム）っていうのがあってヨーロッパの古いホラーが（海外で）再発されたした頃で。それを日本でもやろうとして。当時権利金ってどんな古い作品でも一本200万から300万とかなんですけど、僕は一本100万円って決めて100万円で購入するものをどんどん探して。作品で選ぶ、というよりも買えるものを買う、という考えでやったんで成功したのかな、と。「へんなものみたい」とか「新しいもの見たい」という欲求がある人っていると思うんですよ。そこにDVDブームが重なって。今やるとダメだと思うんですけど（笑）。ライナーとかもつけてみて。

自分で書いてたりしたんですか。

肩山 いや、その時はライターさんとかに頼んで。その時のライターさん達がまんま『TRASH-UP!!』に行って。で、その会社辞めてデックスっていう会社に移ったんですけどそこでは『悪魔のいけにえ』とか『ナイト・オブ・ザ・リビングデッド』とか『ピンク・フラミンゴ』とか出して。

収支的にはどうだったんですか？

肩山 『悪魔のいけにえ』は大ヒットですよ。僕が担当したのは全部黒字だったんですけど。

では話を zine 方面へと持ってきますが、まず「トラッシュカルチャー」とはなんですか？

肩山 もともとアメリカでポップ・アートとか映画とか車とか全部込みの

ローブローアート[※]とかそういうものですよ。

屑山 そうですね、厳密にいうとサーフィンものとかバイカーものとかそういうのが「トラッシュカルチャー」っていわれてるもので。段々話が広がって行って、誰にも相手にされないけど自分の好きな B 級 C 級映画とか、ガレージ系の音楽とか、B 級 C 級パンク、そういうの含めてトラッシュカルチャーという。日本ではメジャーじゃないもの全部でも良いかな、って。厳密な境は無いし。特にダメな映画を敢えて評価するとかでは無いし。あえていえばアンダーグラウンドな、日の目を見ない文化全般と言う感じで。

では『TRASH-UP!!』を作るきっかけは？

屑山 もともとはトラッシュマウンテン時代のライターさんととか何かやりたいね、って言う話をしてたんですけど。で、普通ならバンドとか組んだ方がいじりめな感じかもしれないけど(笑) 僕は物とか作らないけど皆を集める事が出来るんで、「じゃあファンジンかな」、と。

ファンジン、ジンカルチャーみたいなものには馴染とかはありました？

屑山 そうですね。パンクとか言うともまずファンジンじゃないですか。海外だと映画系のファンジンとかもあっただけ日本では映画だと同人誌になっちゃう。

同人とはちょっと意識が違うんですか？ジンカルチャーの流れでやりたいという...

屑山 そうですね。

DIY 文化とかの影響とかは

屑山 ありましたね。トラッシュマウンテンとかでも会社の中でやってることだけど自分らで全部やろうという。音楽の影響とか強いんですよね。音楽だとバンドだけじゃなくてレーベルとか加わって拡がりがあるというか。

総体的な文化ですもんね。

屑山 「俺が俺が」って監督が自己主張強いからそれだけになっちゃう。音楽だと色んな「俺が俺が」があっただけでなんだかんだでレーベルとかでつながってくるという。あと聞くほうの人たちもつながってくる、というか。

受け手がまったく存在してない感じですよ。

屑山 映画って誰のものなのかって考えると監督のものなのか、見る側のものなのか今までどっちかしかなかったと思うのでそういうの取っ払ったあやふやな所に行きたいなって。『TRASH-UP!!』的には一つの文化として押し出したいスタンス的にはひっくるめて押し出したい。

と言うとメインはなんですか(笑)

屑山 (笑) まあ、ホラー映画は核としてはあるかなって。

所謂、商業主義にたいしてカウンター的な意識ってありますか？

屑山 いやあ、どうですかねえ。自分は DVD とか出す側の人間だったんで。ただ、(マイナージャンルを)雑誌とかで取上げられない、とか言うのはあって。メーカー側はただ出すだけで一方通行で。その作品の情報とか買う側は知らないし、下手したら買っても判らない。(背景とかを)紹介するものが要なんじゃないか、っていう。出すだけで良いのかっていうのは。

他の映画 zine とかには共感とかってありますか？

屑山 まったく無いですよ(笑) 一番シンパシーあるのは『DVU』。「ああ『DVU』スゲエな」って。『映画時代』はプロの人達がやってるから。(『TRASH-UP!!』に関して言えば)怒られるかも知れないけど雑誌ゴッコというか。直井さんはね、『Spotted701』は名刺代わりだから。自分の配給作品のパンフレットの的なものだし。

同時期に出てきた現象的な意味は無い？

屑山 印刷代が安くなったからじゃないですか(笑)

では、作るのは大変ですか。

屑山 何で俺作ってるんだろう(笑) っていうもなるんですよ。徹夜、徹夜とかで。

1人でつくってるんですか？

屑山 僕とデザインやってる人と二人で。

収支とかってどうなってます。

屑山 今の所はまあまああ.....。創刊号は一応、完売して。2 合目は 2000 部刷って 1500 位は出て、まあまあ...で。ただ、あんまり広げすぎると雑誌ゴッコの意味がないんで。ある程度無茶できて、っていう。個人でハンドリング出来るぐらいの感じで。

今後の展望は

屑山 まあ.....頑張るって(笑)。季刊なんで年 4 回。あと、どんだけ人を巻き込んで色んなあやふや感を出せるか、という。「こういう雑誌」というのが無いのか売りというか。

では今後の展望としてはあやふや感を出す、という

屑山 なんかよくわかんないな。(笑)

註1 『痴漢ドワーフ』や『コフィン・ジョー』といったウルトラカルトな作品を出していた DVD レーベル。今回のインタビューで買えるものを買っていく、というかなり行当たりばったりのチョイスをしていた事が発覚した！

註2 一般的にはホットロッド文化やバイカー文化の事を指す。所謂、ストリート文化。

第19回映画祭

実行委員募集

急募!

TAMA CINEMA FORUM

TAMA映画フォーラム実行委員会は今年秋に開催する第19回映画祭TAMA CINEMA FORUMにむけてスタッフ（実行委員）を募集します。映画好きな方、イベント好きな方、一緒に映画祭をつくりませんか？

映画祭でこんな企画をやってみたい、イベントの運営なら興味があるなどなど、自分の力を思い切り試してください。

日時 2009年6月28日（日）15:30～16:30頃（受付は15:00より）

場所 多摩市消費生活センター 講座室（ベルブ永山3階）
京王永山駅・小田急永山駅より徒歩約2分

内容

- ・映画祭TAMA CINEMA FORUMについて
- ・映画祭が開催されるまで
- ・実行委員の活動内容
- ・その他

申込方法 こちらの申込フォームより申し込みください。
電話・FAX・メールの場合、氏名・住所・電話番号をお申し出下さい。

申込締切 2009年6月26日（金）午後5時まで

仕事内容

- 上映プログラムの企画
- 広報・宣伝PR
- パンフレット等の制作
- 作品交渉
- ブログ・メルマガ等への書込
- 映画祭当日の運営
- チケットの販売
- 事務局サポート事務
- 各種印刷物の発送
- 企業協賛依頼活動
- 支援会員（寄付金）募集活動
- データベース入力
- コンペティションノミネート作品選定
- カメラ・ビデオ撮影
- 映画祭以外での特別上映会企画
- 資金確保の立案
- 今までにない新企画立案（ワークショップなど）

☆実行委員募集説明会情報はこちらの映画祭Blogのほうでも随時記載していきますのでチェックしてみてください。

☆実行委員会は全て無報酬の市民で構成されていますので実行委員には活動報酬は出ません。

☆スタッフの経験・未経験は問いません。

☆説明会には参加できないけれども、興味があるという方は個別に対応いたしますのでご連絡ください。

TAMA映画フォーラム実行委員会

〒206-0025多摩市永山1-5（ベルブ永山内）

多摩市立永山公民館内 担当：加藤、宮崎、井口、三上

TEL：080-5450-7204（直通）、042-337-6661（代）

FAX：042-337-6003

Mail: tcf-recruit_at_tamaeiga.org（_at_を@に変えてお送りください）

ススメ！映画道

おススメ度 ☆☆☆☆

『1/4の奇跡 ～本当のことだから～』

2007年/日本/ハートオブミラクル配給/102分

<ストーリー>

養護学校の教諭 山元加津子さんと出会う子ども達や、その周りにいる人々との心のつながりを描いたドキュメンタリー。

監督の入江富美子さんが自らホームビデオで撮影し、人がもっている素晴らしいチカラ、誰もが持っている見えないけれど大きなチカラ。生かされている“いのち”に出会う。

映画制作経験は全く初めての2児の母である入江監督はある夜、自分の中の“ありがとう”の気持ちが溢れ出てくるという体験を通して「私は、宇宙に感謝の量を増やす映画を創る！」と決意する。

ひとりひとりが、とっても大切な存在なんだ ありのままの私たちで大丈夫なんだ

私たち人間を支えている尊さとは・・・。

経験なし、人脈なし、資金なし、すべてゼロからのスタート。しかし様々な人との出会いと応援によって完成した映画は現在、全国、海外へと広がっている。

<コメント>

自閉症、ダウン症、学習障がい、行動障がい、等々。一般に知的障がい といってもさまざまであり、また合併症も多いといわれている。他の人に比べて、行動が少しだけ遅い・理解したことが少しだけ違う・うまく喋ることが出来ない。ただそれだけのことなのに、一部の人は彼らのことを社会的弱者と決めつけてはいないだろうか。彼らはそれぞれ認知の差異はあるが、基本的な感情は同じである。人から褒められれば嬉しいし、叱られれば悲しい。ゲームに勝てば嬉しいし、負ければ悔しい。

脳や身体に障がいはあるけれども、“こころ”は誰もがもっている大切なもの。人と人が“こころ”をつなげ、見えないものだからこそ、限りなく広い。

人の前で感情をいかに出さないか、感情がバレるのが恥ずかしい、なんて気持ちもこの映画を観ている時には忘れて下さい。観終わった後もそんな気持ちでいられば幸せですが、私には責任ありませんので。（中村）

おススメ度 ☆☆☆

『鈍獣』

2009/日本/ギャガ・コミュニケーションズ/106分

<ストーリー>

作家の凸やんこと凸川隆二(浅野忠信)の消息を追い、編集者の静(真木よう子)は凸やんの故郷を訪れる。そこにあるホストクラブで、凸やんの幼なじみ、江田(北村一輝)と岡本(ユースケ・サンタ・マリア)、奇妙な人々に出会う。彼らに話を聞いてくうちに、凸やん殺害の話を耳にしてしまうのだが・・・。子供みたいな大人たちの奇妙で可笑しな、ちょっと怖い友情ストーリー。

<コメント>

色彩豊かな世界観。奇妙な設定とストーリー。少年時代をアニメで描く。などなど、とても魅力的で斬新な挑戦を試みている。しかしこの映画の最大の魅力は、個性豊かな登場人物たちが終始フル稼働しているところだ。

それらの要素が相乗効果を生み出し、非言語的な感覚をしばしば強烈に与えてくれる。

その中でも特に、殺しても殺しても死なないほど鈍～い「凸やん」には脱帽の限りである。殺しても「もう、おしまい？」と再び現れる凸やん。その大袈裟すぎる鈍さは、人間の鈍さの怖さを教えてくれると同時に、大切さも教えてくれるだろう。愚鈍な獣、鈍獣。それは人間でもあるのだ。そんな鈍獣たちの世界をのぞいてみてはいかがでしょう。（葛西）

6月14日多摩市にて上映！！『1/4の奇跡 ～本当のことだから～』

ブラッドピット主演！『バーン・アフター・リーディング』

浅野忠信主演！『鈍獣』

パレスチナ問題に肉迫するドキュメンタリー『沈黙を破る』 先駆的不良映画『青い春』

おススメ度 ☆☆☆☆

『バーン・アフター・リーディング』

2009年/アメリカ/ギャガ・コミュニケーションズ、日活/96分

<ストーリー>

ある日、ワシントンのフィットネスジムで働くチャド(ブラッド・ピット)は、更衣室でCIAの機密情報だと思われるCD-ROMを拾う。そこで、このCD-ROMを使って一攫千金を狙おうと、ある計画を思いつく。

その計画は、国家を巻き込む仰天計画だった。1枚のCD-ROMが原因となって繰り広げられるクライムコメディ。

<コメント>

もっと登場人物たちがはじけている映画なのかと思っていたのですが、爆笑ではなくシュールな感じてした。

予想には反しましたが、見ていて「こんなことってあっていいの？」と、疑問を持ってしまうようなありえないことが続き、5人はどうになってしまうのか目が離せませんでした。

そして、何よりもキャストが豪華！その中でもブラッド・ピット演じるチャドが最高でした。おバカで憎めないキャラです。内容はブラックユーモアなので日本人向けとは言えませんが、アメリカンコメディが好きなお人々にはお薦めです。（岡本）

おススメ度 ☆☆☆☆

『沈黙を破る』

2009年/日本/シグロ配給/130分

<ストーリー>

2004年6月、テルアビブで「沈黙を破る」と題した写真展が開催された。主催したのは20代のイスラエル元将兵たち。

彼らは占領地で撮影した写真や証言ビデオなどを展示し、占領の実態やそこで自分たちがしたことを語り始めた。重圧に耐えて彼らが語り始めた理由とは……。

20年以上にわたりパレスチナを撮り続けた土井敏邦監督による映像は、若者たちの証言を裏付けるように綴られていく。

<コメント>

包囲された「世界で最も人口密度が高い場所」を駆け回るひとたち。

「首相の家で自爆したい」という子どもの眼。

耳を突き刺す爆音と流れる血、瓦礫の山……。

現場に密着して撮られた映像は、2002年のイスラエル軍によるジェニン難民キャンプ侵攻、バラータ難民キャンプ包囲などを克明に伝える。

イスラエル元将兵の「沈黙を破る」メンバーたちは、対立を超えた人間性の次元でパレスチナ・イスラエルの問題を語り始めた。軍隊という組織のなかで自分たちがいかに思考停止し“怪物”になっていったかを振り返り、真剣に社会のありかたを考えている。社会や組織というシステムがもつ負の側面は軍隊に限られたものではないと思う。日本にいる私たちも他人事では済ませられない社会批評の要素・視点を見出せる素晴らしいドキュメンタリーだ。（山口）

おススメ度 ☆☆☆

『青い春』

2001年/日本/ゼアリスエンタープライズ配給/83分

<ストーリー>

男子校・朝日高等学校。4月、新しく3年になった不良グループはいつものように屋上に集まり、柵の外に立ち手をたたく回数を競う通称“ペランダゲーム”をしていた。そのゲームに勝利した者が番長となり、学校を仕切る。勝ったのは九條(松田龍平)であった。しかしそんなことは九條にとってはどうでもよかった。

<コメント>

「不良」と聞くと、「クローズZERO」のようなケンカアクションを想像するだろうが、この映画はそれとは違う。高校3年になり嫌が何でも現実を見つめ、自分の将来を考えなければならなくなる青春時代。それぞれの青い春へと向かい、それぞれの花を咲かせようとする不良達。そんな彼らの心理が中心に描かれている。他の青春映画では描かれることのない不良達の“青い春”を感じて欲しい。（鍛）



**TAMA
CINEMA
PROC.**

is...

OF THE

**TAMA
CINEMA
FORUM**

BY THE

**TAMA
CINEMA
FORUM**

FOR THE

**TAMA
CINEMA
PEOPLE**